



## 人間、失格？

---

「夢や希望を持たせる仕組みは沢山あるけど、人間の感じる苦しさとか寂しさを救うのは誰がしてくれるんだろうって」

この前、とある経営者の方にお話を聞く機会があって彼女がふとそんなことを口走っていたのが心に残った。

私が太宰治の作品を初めて読んだのは、大学に入学してからだった。

だから特別早い時期に出会ったわけでもないし、むしろ自称読書家を名乗るならとても乗り遅れた太宰デビューだったと思う。

ただ漠然と純文学というものに憧れがあって、まあ一種のかっこつけのような感覚で手に取った。

誰もが一度は「読んだ読んだ」と言いたくなるような、

### 『人間失格』

「偽」とか「似非」とかいう言葉に人一倍敏感だった私には、その小説の雰囲気妙にしっくりきた。

周りの環境に飲み込まれないように埋もれないように、適応しようと精神を鍛え、結果ピエロのようにしか過ごせない自分を看過することができず、毎日がコンフリクト。

まー、ずいぶんとメンタル的に辛い期間だったなあ、と今振り返るとそう思う。

そのとき太宰さんといっしょに過ごしていたなあ。笑

ポジティブな言葉が人を明るくさせて前に進む勇気を与えることもあれば、同じように、暗くて憂鬱な文章が人を救うこともあると思う。

悲しさや孤独にひとりだけで向き合うのは厳しい。

誰にも理解されないような、理解してほしいような感情を吐露できる場所、苦しさに寄り添ってくれるものが、本を開くとそこにあった。

なかには「考えても仕方がないこと」と割り切れる人もいるし、  
それこそ至極まっとうな答えだと思うけど、  
人はいつもまっすぐでい続けられるほど強くない。

それがわかってから、少しだけ自分と人を許せるようになった気がするのです。  
まあ、なんとなくだけだね。